

令和6年度 第2回岐阜市立図書館協議会 議事概要

日 時：令和7年2月13日（木）午前10時00分～12時15分

場 所：みんなの森 ぎふメディアコスモス1階 第一会議室

出席者：【会場12名】久世 均委員（会長）、高橋 綾子委員（副会長）、門屋 伸子委員、
河合 美佐子委員、永田 洋介委員、いずみ 凜委員、大野 正子委員、
神 尚喜委員、平賀 研也委員、小野寺 華委員、多田 知美委員、
棚村 勇夫委員

【オンライン1名】嶋田学委員

【欠席1名】浅井彰子委員

（事務局）長尾館長、野々山副館長、土谷係長、富長係長、近藤係長
川瀬係長、塩谷係長

傍聴者：なし

議事概要：

■報告や事務局提案に対する委員からの意見

（１）２０２４年度事業実績報告について

- ・ ショートショート発表会のタイトルについて。「ぼくのわたしの」はLGBTQやジェンダー等、今の時代性を考えると2つの性だけを指す言葉だけというのはどうだろうか。多様性を受け入れた応用ある言葉を考えてもよいのではないか。
- ・ ショートショート発表会は非常によい事業だと思う。というのも図書館自体の機能は変化してきている。これまでは知識を獲得する位置づけだったが、今後は知識を循環する社会になっていくだろうと考えている。知識を獲得するだけではなくそこから新たな知識を発信していく。その意味では作品応募はまさしく新たな知識を創造し発信する場なので、知識循環型社会移行に非常に大事だと思っている。作品は公開するのがいいと思う。この図書館の特色が出ている良いイベントだと思う。
- ・ ジェンダー視点からの発表会のタイトルに関して。変更の予定はないとのこと、今年度はこのままとしても、今後もジェンダー的視点については認識を共有してもらいたい。日本全国から集まってきた作品なので、全国の中高生が読める形なのは、すごくいいと思う。
- ・ 「なろう系」と言われる我々の思う文学文芸とは全く違う世界が広がっており、出版社もWeb上に発表された中から出版している。YAという分類も今までとは違う世界になっており、ショートショートも文学やエッセイの延長線上ではない違う世界に、若い人たちが創作の知的循環を生み出していることが見えるようになると思う。ショートショートを真ん中に、次世代の文学・文芸がこの

場所で見えると素晴らしいなと思った。

- ・ もう「めざせ直木賞」とか「芥川賞」ではないらしいので、若い人たちがそれをどう見てほしいか、という視点で（作品集が）見られるといい。ほかの図書館では肩身の狭いサブカル的扱いが多いので、そうではない世界をぜひメディコスから発信してほしいと思う。
- ・ 郷土情報のデジタルアーカイブ整備について。デジタルアーカイブは目的ではなく手段だと考えている。郷土資料を中心にデジタル化したことは先進的で素晴らしいことだが、将来的にこれをどうしていくのか。目的をもう少し決めていかなければならないと思う。大阪市立図書館ではデジタル化したものをオープンデータとして公開している。そういう形を通して、例えば産業や岐阜県のシビックプライドを高める、また広報などにつなげられるといいと思う。今後資料をデジタル化するだけでなく、目的や活用についても一度考えてほしい。
- ・ 今1階のシビックプライドプレイスに蓄積されている今の方々の記録等は、編集講座受講生が取材している様子が見て取れた。その意味では集めていくアーカイブ活動も大事だと思う。
- ・ 例えばプレイスのコンテンツ作成に編集講座受講生が関わるように、図書館のアーカイブ化作業も編集講座受講生等と一緒にすることは、図書館のためにも面白いと思う。
- ・ 例えば編集行為の一環として写真をデジタル化しアップロードする。メタデータ記事に単なるキャプション以上の情報を付加する等の編集作業を市民も一緒に活動できたら、シビックプライドプレイスの動きがそのまま図書館のアーカイブ活動として一緒にできるのではないかなと思う。

（２）第３次岐阜市子どもの読書活動推進計画 令和６年度の成果について

- ・ 昨年２月に講師として図書館全職員向けの研修とワークショップを行った。その中で日々の業務について「誰のために、何のために行っているのか」を職員内で議論を深める時間を作った。普段そのようなことを話す機会があまりないこともあり、皆の考え方はバラバラだった。組織としては[読書環境の充実]や[読書啓発活動]と作りがちだが、単に「読み聞かせのやり方を教える」ではなく、「何のために」「誰のために」読み聞かせをするのかという「やる方の気持ち」の部分が一番大事だと思う。
- ・ これだけ多くの事業を行うことは大変だと思うが、だからこそ整理が必要だと思う。我々は成果として[その子たちが本を読んでほしい]と考えがちだが、技能ではなく気持ちを図書館職員には大事にしてほしいと思う。ぜひ時間を作って「どういう姿勢で子どもたち、親たちに臨もうか」という話が職員間でできるようになるといいと思う。
- ・ 児童心理学等で子どもに読書をさせることで成人後にどのような影響があるの

かについての研究・調査がされていると思う。読書推進とは何のために行うのか。いま子育てに直面し色々な悩みを持つ親にとっては、子どもと本を介してフラットに過ごせる瞬間だったり。小学生は「(本を) 読め、読め、読まなきゃいけない」ということではなく、「うわ、楽しい!」という感覚や、発見の面白さを。高校生には、どういう気持ちで子どもたちに接したらいいのか、とか。そこが大事だと思う。結果として本をたくさん読むことにつながるかもしれないが、その結果よりも[いま何を大事にしてそれに臨むか]を、活動を展開する側として大事にしてほしいと思う。

- ・ 実施報告だけでなくその活動中に参加者に何が起こったのかという質的評価にも踏み込んでほしい。参加者からの聞き取り調査から、何のために実施しているかが浮かび上がってくる。この図書館は公共図書館の中でも非常に注目も高いが、一方で職員は日々の業務に忙殺され自分たちを振り返る余裕がない。その背景には地方公共団体にも業績評価が入り、いかに活発な活動を量的にこなしていくかが評価軸として注目されることがあるのかもしれない。職員が図書館の仕事を本質的に振り返り、また(事業に)参加した市民の感想から採録し質的評価していくことが非常に望ましいと感じた。館長から次年度は精査したことを予算に反映しているという話があったので、この10年を経てどのように整備されるのか今後を非常に楽しみにしている。
- ・ 「はじめての図書館」で岐阜に生まれた多くの赤ちゃんが利用カードを作るとは素晴らしいと思う。10年ほど前から非認知能力や社会情動的スキル等の大切さが経済協力開発機構からも出ており、世界的にそのエビデンスについて話されるようになった。発達においても「赤ちゃんの頃から」というのがとても大事だと言われている。また、読み聞かせや共読など一人の読書ではなく、いろんな人と関わりながらということがますます大事になってきていると思う。ワンオペ育児とか言われている中、利用カードを作った人たちがその後も図書館に来る、その継続の働きかけにも力を入れているのはとても素晴らしいことだと思っている。あと「パパたちのおはなし会」が読み聞かせの中から生まれたというのはどういうことなのかを知りたい。父親も本を通しての子どもとの関わりが生まれてくるというのも、社会的にとっても重要なことだと思うので素晴らしい活動だと思う。「楽しさ」や「わくわく」が好奇心や探求心を育てていくし、読み聞かせなど、その楽しみを人と共有することでコミュニケーション能力にもつながっていく。読書することそのものだけでなく、それが子どもたちの発達や育ちをいかに豊かにしていくか、どんなことにつながっていくのかを常に考えていくことはとても大切だと思う。
- ・ 早い時期からの読み聞かせの根拠について。少し検索するだけでこの10年の間にいろいろな国際的研究機関から研究結果が出てきた。いずみ委員も言っていた

共感力、コミュニケーション能力の向上についても、研究では向上することが実証されている。職員が業務の本来の意義と目的が明確にならずベクトルが揃っていないという点について、私は悪いことだとは思っていない。職員も今の職に就くまでの経緯も価値観も異なるだろう。これは業務遂行の上で永遠の追いかけっこだと思っている。企業も多様な企業理念があり、地域社会への貢献とは言っても利益がなければそれは実現しない。二宮尊徳（金次郎）の言葉に『道徳なき経済は犯罪であり、経済なき道徳は寝言である』があるが、これは両方を追いかけていけばいけないと思っている。結果として全ての子どもたちが本を読むようになりそれで幸せな社会が待っているかという、そういうわけでもない。それを実行する職員が本当に意義とやりがいを感じ、ある意味楽しくやっていかないと何もいい結果はないのではないか。というやり取りを聞き、なるほどと感じた。

- ・ 「絵本といっしょ」では絵本のプレゼントはなかった。他県では既に絵本プレゼントを実施しているが岐阜市は遅れていると思っていたが、今は（「はじめての図書館」で）絵本を1冊贈られるようになり、とても良いと思う。「パパたちのお話し会」について。分館では男性司書がおはなし会で手遊びや読み聞かせをしているのがすごくいいことだと思う。分館のおはなし会は土曜日に実施しており、父親が乳幼児連れで参加することが多いのでこういうこともとても良いことだと思った。

（３）岐阜市立図書館での資料収集について

- ・ 電子書籍のコストパフォーマンスについて。電子書籍の短所は指摘通りだが、文部科学省で取り組んでいる「図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議 第2回」で、植村八潮氏（専修大学 教授）が電子書籍の回転率が非常に良いことを指摘している。特に学校図書館での活用でその回転率が伸びたということで、その報告書を参考共有する。（「図書館・学校図書館におけるデジタル活用の概況と今後の運営充実に向けて 電子図書館・電子書籍サービスの導入状況を中心に」2025年1月）
- ・ 街の書店と比較すると図書館の本が古いように見える。2週間に1回図書館を利用しているが、同じテーマでも図書館は古い資料ばかり目立ち、街の書店では新しい本が多く並んでいるように見える。新しい本を図書館に買うことはできないのか。もう1点は本が置かれている場所について。色々な場所に様々なテーマで本が散らばっている感じがする。
- ・ 書店は年間約8万点の今出版されている本が置かれ、図書館は蓄積をしている。「流れていくもの」と「溜まっているもの」の違いはあるが、実は同じように「新しいもの」はある。しかし溜まる総量の中では「これが新しい」というのが見えにくい。岐阜市立図書館は予算をきっちり持っているので、小さな書店が太刀打できないくらい多くの新本を入れているはずだ。そういう意味では蓄積の中に今

の流れているものが埋もれていると思う。それから展示が散っていないかという話では、図書分類というのは学校で習う教科のような学問的分類だ。しかし私たちの暮らしは教科分類で暮らしているのではなく、「食べる」とか「住む」とか生活目線で何かを知ろうとしている。書店の棚は生活目線で本の塊を作っているが、図書館は膨大な量の中から探しやすいという理由で学問的体系に沿った並べ方をしている。ただそれだけではなかなか興味関心を持ってないから、テーマで塊を作り展示グローブ等で「テーマ展示」として見せていることをしていると思う。これは図書館と書店の根本的な違いだと思う。

- ・ 資料収集について見直したいと言うが、説明された資料3は一般的な話で、このレベルでいくら書き直しても同じだと思う。「初学者のため」など資料収集規定に記載のない内規とか日々の申し合わせの中で決めていることをあえて規定化することをこの段階で議論するのはとても危険だと思う。特に有害図書については「有害とは何か」ということを語り出したらきりが無い。公序良俗も一概に言えず抽象的で、規定したことで恣意的な運用をされる怖さがある。要するに収集規定の中で「この書き方では限界があるから見直そう」というのはいかなものか。むしろ「概説書」とか「知の入り口を作りたい」など[収集保存]ではなく「どう使うか、どう見せるか」という書き方に180度変えるのであればいいと思う。今や収蔵資料を館内で提供する従来型サービスの時代はおしまいだと思う。中央図書館は規模が大きいので提供量も多いが、それ以上に我々がWeb上で入手する情報が増えている中、いかに保存することに焦点を当てても仕方がない。デジタル情報をダウンロードして保存すると言ったが、もしそれがWeb上から消えて問題ないのならば消えればいい。本も絶版になるのだから。保存・収集することに意識が向いているが、むしろ「何に使うか」に意識を向けた方がいい。そういう意味では図書館も収蔵物を館内で提供するところから、非収蔵情報も館外利用できるように提供する方向へポジションが大きく変わってきている。国立国会図書館の例があるように、そのことを意識した方がいいと思う。
- ・ 私は今30代で、10歳ぐらいまでは岐阜のアパレル産業がまだ残っていたと思うが、それ以降は岐阜の歴史の一部で文化としては捉えていなかった。私の中では漫画の方が多く子どもたちに文化として残っていたと思う。そういう意味ではファッション資料を残すのと同時に漫画資料も残していく方がこれからの文化を作る意味で重要な資料になるのではと思う。紙や造作の脆弱性、ページのコマ割りが時代と共に変化していることなどは実際に触れて分かることなので、そこにお金をかけるのは文化を作る上では重要なことだと思った。
- ・ 国立、県立、市立図書館の棲み分けは難しいと思う。言葉では「専門的実務書」「初学者向け」と言うが、大学向けテキストは別にして、そうきれいに分かれるものではない。逆に大学のテキストに使われるものが実は概論、概説として一般

人にとって大事になるものもある。公共図書館は定期的に古い本を廃棄している。公共図書館は全てを保存する国立国会図書館と書店の中間の存在とも言える。先程から収集・保存を強調して考えているようだが「何を保存・収集するか」ではなく、「誰が何をを使うのか」を軸に収集方針を決めることも一つの方法だと思う。例えば「初学者」とは誰のことか。「概説書」とは何を指すのか。「いま」を切り取るには何を集めるか、という風に考えると、「概説書」「初学者向け」ではない特定のちょっと違う書き方ができるのではないか。行政資料の収集について、国立国会図書館ではWARP（インターネット資料収集保存事業）でホームページのアーカイブをしている。そこでかつての岐阜市のホームページを見ることができる。消えてしまうからといってプレスリリース等をダウンロードし保存する手間をかける必要はないのではないのか。もしそこが問題だと思うならば、公文書をデジタル化して共有する仕組みを図書館から市へ働きかけるべきではないか。岐阜市でデジタル公文書館を作り一定基準の公文書はデジタルにして持つということを働きかけるのが今の時点での図書館の責務ではないかと思う。

- ・ 資料収集に関する検討事項について。これは全国の図書館でも長く議論されている正解がない悩みだが、今後も検討するべきだと思う。検討には背景データを持った上で行うのがよい。例えば岐阜市の産業就業種別人口統計から業種を細かく割り出し傾向を見る。あるいは実際に購入した本の年間蔵書回転率などが背景データとして使える。そういうバックボーンの上で、ファッションや学校連携、シビックプライドというベクトルとしての枠組みと、利用者傾向などを総合的に見ながら資料収集基準外に対しての方針が内実化され現場で活かされやすい状況を作るのがよいと思う。今回協議会にこのテーマを挙げたのは評価できるが、課題提示のみで終わっていて論点整理がまだできていないように思う。職員間でこの課題をどのような議論をした上での考え・方向性を協議会へ投げかける諮問の形ならば議論の糸口もあるが、これから検討する提示の形では、委員も意見を出すのが難しいと思う。職員の議論の方向性があれば教えてほしい。
- ・ 美術館では資料収集の専門委員会が設置され、収集に関しても大枠の方針がある。個別の現場でも様々な悩みがあるが、学芸員は個人ネットワークを持ち、別の市の学芸員に相談している。司書の世界も同様と思うが、他館と関係を築きながら個別の悩み事なり情報共有をすれば解消されることが多いのではないかと思う。今日の報告は非常に高評価ではあるが、それを支える人員や予算を多くつければ済む話ではない。予算がついたらその分仕事が増えるので、人員構成についての増員計画をしっかりといただきたい。これは協議会の議事録にぜひ残してほしい。（本の選書は）個人的な関心で選択しないのは当然だが、司書が分野の専門性に矜持を持った運営をして欲しいので、その意味でも忙殺されずにプライドを持って専門性と仕事を楽しめるような環境になってほしい。そのためにはや

はり人員が不足しているのではないかと感じる。